様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０２０２８

研究課題名（和文）アカデミック・ハラスメントを生み出す医歯学系研究者の研究サブカルチャーの分析

研究課題名（英文）An analysis of the research subculture of medical and dental researchers that generates academic harassment

研究代表者
北仲　千里（KITANAKA, Chisato）

広島大学・ハラスメント相談室・准教授

研究者番号：６０４６７７８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　欧米圏で、Academic Bullyingとしてバイオメディカル分野においても実態調査がなされていることがわかった。
全国国公立大学の医歯学系の教員は、半数以上を「助教」が占め（とりわけ臨床系分野では圧倒的に多い）、臨床の現場で働く医師と大学教員との区別が比較的緩やかであること。講師の職位が比較的多く、助手の職位も残っている大学もあるなど、医歯系では研究者としての大学教員とは少し異質な「大学教員」がかなり含まれている可能性がある。
アンケート調査の回答から、研究組織の圧倒的多数が講座制であり、研究費も講座でまとめられていること、ギフトオーサーについては、アンビバレントな態度が見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
医学部等がある大学において、その医歯学系の教員数は大学全体の教員のうちのかなり多くを占めるが、その独自の特徴が指摘されることは少ない。バイオメディカル分野は研究倫理の面で大きな影響力をもっており、調査結果からも、国際ジャーナルに研究成果を発表している割合が高いことが明らかである。しかし、その分野の研究者が独自の強固な「講座制」研究組織に属し、オーサーシップに関してもアンビバレントな態度を持っていることは注目に値する。

研究成果の概要（英文）：Some surveys of Academic Bullying in the biomedical field as has been conducted in Europe and the United States.
More than half of the medical and dental faculty members at public universities in Japan are " assistant professors" (the overwhelming majority in clinical fields in particular), and the distinction between physicians working in clinical fields and university faculty is relatively loose. It is possible that the medical and dental fields include a considerable number of " university faculty members" who are slightly different from university faculty members as researchers, as the position of lecturer is relatively common and the position of assistant professor remains in some universities.
From the survey responses, the overwhelming majority of research organizations are "Koza system", and research funding is lumped together by the "Koza", and there was an ambivalent attitude toward gift-authorship among researchers.

研究分野：社会学

キーワード：研究組織　アカデミック・ハラスメント　研究倫理

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

1. 研究開始当初の背景

近年、アカデミック・ハラスメントや研究不正が問題化しているが、その一方で「何をアカデミック・ハラスメントと考えるのか」という戸惑いの声、認識のずれも表面化している。その背景には、どんな研究指導のあり方が妥当なのか、どのような研究者間の関係性を当然と考えるかをめぐる、研究分野や所属組織間のサブカルチャーとでも言うべき大いなる多様性がある。そこで、当課題の研究者らは、これまでも自然科学研究に特有の研究状況・慣行・様式を把握し、その研究活動の特徴や研究成果の形式・オーサーシップ等の特徴を明らかにしようとしてきた。

2. 研究の目的

医歯学系は、通常の自然科学研究者のサブカルチャーに加え、臨床の医療行為の組織との二重性があり、医局講座制などの特有の研究組織のあり方があると思われる。同時に、バイオメディカル領域は激しい国際競争によるストレスにもさらされやすい。これらの点から、先行研究の（医歯以外の）自然科学系研究者の調査と比較しつつ、医歯学系の研究領域の組織やその他のサブカルチャーを把握することを目指す。

3. 研究の方法

文献研究及び、アンケート調査による量的調査研究を行った。アンケート調査のために、国公立大学のウェブサイトから、医歯学の大学教員の情報を抽出し、それと平行して、この領域独特の職名の実情について聴き取り調査などを行った。【アンケート調査の方法】①調査対象：全国の国公立大学の医学部、歯学部および附属病院の教員（看護学・薬学やリハビリ等の保健学分野と識別できる教員は除外、客員、非常勤等は除く）を大学のウェブサイトの名簿などで情報収集し、教授・准教授及び講師・助教及び助手の三つのカテゴリーに分けて無作為抽出した 1434 名に調査票を送付した。②調査の送付と回収：依頼文は日本語と英語で書き、郵送での調査票（日本語）およびオンラインで日本語と英語で回答できる形で回収した。依頼状には、「日本社会学会倫理綱領及び研究指針をふまえて実施している」こと、回答は匿名で統計的に処理されるため、ハラスメントや不正行為の項目に回答しても調査や告発が開始される可能性は一切ないことを付記した。

【回収結果】退職や他病院への配置などで、102 通が郵送で受取人なし等で返送され、また、メールや電話などで同様の連絡が 11 人分あった。したがって、相手に届いたと推定される調査票は 1321 通。郵送回答は 227 通、オンラインでの英語の回答は 1 通。オンラインでの日本語の回答は 220 で、うち重複回答と思われる 7 回答を削除（＊）したため、有効回答とみなしたものは、213。ほとんどの設問に無回答の 1 回答をさらに削除して、有効回答の合計は 440 であり、回収率は 33.3％である。＊オンライン日本語回答　220 のうち、21 組は同一 IP アドレスから入力されていたが、内容を確認し、4 組を同一回答者が二回回答したものとみなし、また 1 組を同一回答者が 4 回回答したものとみなして、7 つの回答を削除した。

4. 研究成果

以下は、オンラインでの回答（n＝213）の暫定集計の概要である。

(1)回答者の構成

【職位】教授　38.5％(82),准教授 19.7％(42),講師 19.7％(42),助教・助手 31.5％(67)、その他 0.9％(2),無回答 12.7％(27)

【性別】男性 76.1％(162)、女性 11.3％(24)答えたくない 0.5％(1)、無回答 12.2％(26)

【所属】研究院・研究科や学部　47.4％(101)、病院　37.1％(79)、センター・研究所等　3.3％(7)、

無回答 12.2%(26) ＊助教/助手は病院所属が多い傾向がはっきりとみられ、サンプル抽出時の傾向が回答者の構成としても裏付けられた。

【講座制の研究室】92.8%(194)

大学から出る各教員への研究費(運営費交付金)が「研究室・講座・分野などで一つにまとめられている」が(無回答をのぞく)有効回答の71.8%、科研費などの外部資金の30.9%が「研究室・講座・分野などで一つにまとめられている」であり、医歯系は強固な講座制であり、予算執行面でも個人単位ではないという一般的に言われていること(調査者の仮説)が、確かめられた。

【医師免許あり 60.6%(129)、歯科医師免許あり 3.8%(8)】
【日本国外で1年以上の研究歴がある】35.2%(75)、
【国外で1年以上の臨床経験がある】7.0%(13)
13.1%(28)の回答者が、医師か歯科医師の親をもち、6.6%(14)の回答者が研究者/大学教員の親をもつ。

(2)研究の内容

	%	n
基礎研究	33.8	72
臨床	33.8	72
基礎研究と、臨床の症例研究の両方	23.9	51
その他	3.3	7
研究にはたずさわっていない	3.3	7
合計	98.1	209
NA	1.9	4
合計	100	213

(3)主に従事していること

	%	n
臨床の治療等	10.3	22
臨床と、教育	11.3	24
臨床と研究と教育	40.8	87
研究と、教育	31.0	66
研究	4.7	10
NA	1.9	4
合計	100	213

(4)主要な研究業績のタイプは、「論文」が72.3%
自分の主要な研究業績が「論文」と答えた人のうち、有効回答中 94.2%が英語論文、91.2%が原著論文、99.3%が「査読付き」。

その論文の掲載媒体は

	%	n
国際総合科学雑誌 （「Science」「Nature」など）	21.9	30
海外の学術専門誌	67.9	93
国内の学会誌などの専門雑誌	8.8	12
大学や機関の紀要	0.7	1
調査報告書	0.7	1
合計	100	137

著者数は、1 人～23 人で、最頻値が 10 人（13.6%）、ついで 4 人（12.7%）
助教/助手以外の職位では、8 割以上が主要論文業績のコレスポンディング・オーサーだが、助教や助手では、48.7%にその割合が下がる。

（5）オーサーシップについての認識

「実際に研究にかかわっていない人が、共著者に名前が入ることについて、あなたはどう思いますか。」との問いに対し、4 割近くが無回答。「明らかに問題」と回答する割合は、教授、基礎研究の回答者に比較的多い。

	%	n
明らかに問題である	28.2	60
場合によっては問題である	31.5	67
あまり問題ではない	2.3	5
問題ではない	0.5	1
無回答	37.6	80
合計	100	213

ギフト・オーサーシップについての考え（複数回答）

	選択率（%）	n
何を指して「研究に関わってない」と言うのかは難しい	27.2	58
研究倫理上入れるべきではない	25.8	55
著者に入れずに謝辞で十分である	22.5	48
広く行われている慣習である	16.0	34
人間関係上入れないと支障がある	17.8	38
国際雑誌の投稿規程と日本の現状にずれがある	12.2	25
入れるように指示されることがある	11.3	24
お世話になっているから入れることがある	8.5	18
指導教員や研究チームのボスが誰かがわかるのでむしろ必要である	5.2	11
共著者が著名である場合、投稿の際に有利に働く	3.8	8

定義が「難しい」という意見と、「入れるべきでない、謝辞で十分」などと言う意見が拮抗している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 北仲　千里
２．発表標題 日本におけるキャンパス・ハラスメント対策の道のり―キャンパス・セクシュアル・ハラスメント運動からアカデミック・ハラスメント、SOGIハラスメント、研究不正問題まで
３．学会等名 Seoul National University(Korea),SNU Human Rights Center the Webinar Series, New Horizons for Human Rights and the Higher Education（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 北仲千里、横山美栄子
２．発表標題 アカデミック・ハラスメントの実態と特徴―大学教育と研究者世界の両面からー
３．学会等名 日本教育心理学会第63回大会　2021年ハラスメント防止委員会企画シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 北仲千里	４．発行年 2021年
２．出版社 かもがわ出版	５．総ページ数 10
３．書名 『脱セクシュアル・ハラスメント宣言』角田由紀子他編「大学でのセクシュアル・ハラスメント」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	横山　美栄子 (YOKOYAMA Mieko) (50259660)	広島大学・ハラスメント相談室・名誉教授 (15401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関